

リコーダー・アンサンブルを用いた音楽教育の実例 と一考察

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-02-21 キーワード (Ja): リコーダー・アンサンブル, 音楽教育 キーワード (En): Recorder Lessons, Music Education 作成者: 柿原, 順子, Kakihara, Yoriko メールアドレス: 所属:
URL	https://senzoku.repo.nii.ac.jp/records/692

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



リコーダー・アンサンブルを用いた音楽教育の 実例と一考察

A Consideration of Ensemble in Music Education through my Recorder Lessons

柿原 順子
Yoriko Kakihara

1 はじめに

リコーダーは、ほとんどの人が一度は触れたことのある親しみやすい楽器である。1950年代に音楽教育に取り入れられて以来、現在まで小・中・高等学校の音楽の授業で用いられている。また、学校の課外活動としてリコーダーに力を入れている地域もあり、大学生や社会人の愛好家も多く、小学生から中・高校生・社会人一般までを対象にしたリコーダー・コンクール（アンサンブル部門及び独奏部門）が、1970年代から毎年全国各地で開催されている。音楽教育におけるリコーダー・アンサンブルの意義として重要なのは、

- 1 リコーダーが自然な呼吸で吹くことができる楽器であるため、心が安定し、その結果集中力がつく。
- 2 ハーモニーの調和による一体感を味わうことができ、協調性の向上につながる。

筆者のこれまでの教育経験から、以上の2点と考えられる。

本研究の目的は、その2点を中心に、筆者が担当している洗足学園音楽大学の「合奏実習」及び「リコーダー・アンサンブル」という授業における筆者の実践と工夫について分析し、リコーダー・アンサンブルの意義を確認することである。そして、それを今後の音楽教育の発展に生かすことである。

どちらの授業も、半期（15回）であるため、授業の前半では、姿勢・呼吸法・音の響かせ方の導入から、テキスト『アルト・リコーダーの世界』（河西保郎編著）を教材として、リコーダーの基本的奏法を指導した。後半では、クラスを4～5名のグループに分けて、ルネサンス期の音楽を中心に小編成のアンサンブルを実習し、最終回の授業では発表会を行った。

また、授業の内容が学生一人一人にどの程度伝わっているかを確認するために、前半のソロの試験後と後半のアンサンブルの発表後に、本番の演奏と授業の内容についての自己評価アンケートを行った。

さらに、全国で教職についている卒業生に、「在学中に受講したリコーダー・アンサンブルの授業が、

現場の教育活動にどのように繋がっているか」について、聞き取りを行った。

これらの実践報告を踏まえて、リコーダー・アンサンブルの意義を音楽教育の発展に生かすために、今後の課題を明らかにしたい。

2 リコーダーの基本的奏法

リコーダーの基本的奏法として重要なのは、まず、「良い音を作ること」と考えられる。良い音を作るためには、「自然な呼吸」が必要であり、「自然な呼吸」をするためには、「良い姿勢」が必要になる。リコーダーの基本的奏法として、授業ではタンギング、運指等の指導も行っているが、今回は「姿勢」・「呼吸法」・「音の響かせ方」の実践について検討したい。

2-1 姿勢

自然な呼吸でリコーダーを吹くために、初回の授業では、次のような簡単な体操から行っている。

- 1 立った状態で腰を回す、肩を回す、首を回す等の身体ほぐしを行う。
- 2 脚を軽く開いて立ち、息を吸いながら両腕をまっすぐに頭頂に伸ばし、手を組んで伸びをする。体が伸びたら息を吐きながら両腕を肩の高さまで下ろし、そのまま5秒保つ。そのまま両腕を体に沿うようにゆっくりと下す。
- 3 2の動作をもう一度行い、両腕を肩の高さで横に広げたら、手のひらだけを上に向け、5秒保つ。そのまま両腕を体に沿うようにゆっくりと下し、最後に手のひらを内向きに戻す。肩関節を外側に回すことにより、胸が開いて深い呼吸をする体勢が整う。
- 4 両腕を胸の前でクロスしてゆっくりと首を前後に動かす。

この一連の動作をすることで、体の重心が頭頂から両脚の間に落ちるため、下半身が安定する。安定した下半身の上で、上半身は力が抜けて自由に動くことが出来る。また、両腕を横に開いて手のひらを上に向けることで胸が開く。日常生活では前かがみで同じ姿勢を続けていることが多いため、胸が閉じて浅い呼吸になっている。深い呼吸をするためには、まず、胸を開くことが重要である。

「自然体で立つ」ということについて、齋藤 孝は『身体感覚を取り戻す 腰・ハラ文化の再生』のなかで、次のように述べている。

二

立つことが技であるのは、「自然体」と呼ばれる立ち方において端的に示される。自然体の場合は、しっかりと地に足がついており、その大地との繋がりの感覚が腰と肚につながっている。武道・芸道においては、その人の立ち方を見ただけで力量をある程度推し量ることが出来るともいわれている。立つこと自体が一つの技であることは、伝統的な身体文化の文脈においてはむしろ常識に属する事柄であった（齋藤 孝 2001 p.14-p.16）。

さらに「どうやって立つのか」については、

自然体の立ち方の基本はおよそ次のようである。

足を肩幅に開いて膝を軽く曲げ、両足にほぼ均等に体重をかけて腰と肚はしっかりとさせておき、背筋はすっと伸びて肩の力は抜けた状態である。自然体は安定した立ち方であり、少々押されてもぐらつきにくい立ち方である（斎藤 孝 2001 p.17-p.19）。

座って演奏する場合には、上述の立った姿勢から骨盤を立てて椅子に座る。日常生活での座り方は、前屈みや椅子の背に寄り掛かった座り方が多いため、授業では、まず、教師が骨盤を前傾した座り方と後傾した座り方を示して、学生に自分の体の状態を把握してもらい、それから、「骨盤を立てた座り方」を指導する。すると、クラス全員の背筋がすっと伸びる。さらに、この姿勢を保つために臍下丹田に力を入れる。このお臍の下に力を入れる動作は、次に実習する腹式呼吸に繋がっている。



図1 骨盤（仙骨）を立てた座り方（本文 p.2-l.36 ~ p.3-l.4）

(<https://www.karada-aging.jp/practice/sonota49/> 2017.7.9)

2-2 呼吸法

横隔膜の動きを感じて腹式呼吸をするために、上記の姿勢で次の動作を行う。

- 1 お腹の動きを感じるために、お臍の下に両手を重ねておく。
- 2 口からお腹がへこむまで息を吐ききる。
- 3 2, 3秒息を止めてからお腹を緩める。すると、体の中に自然と息が戻ってくる。
肩の力を抜いてお腹の動きを感じながら、2～3の動作を繰り返す行う。
呼吸に意識を集中するために目を閉じて行ってもよい。
- 4 次第に吐く息を長くしていき、戻る息は短くしていく。
- 5 次に、吐く息をストローに吹き込むように細く長くして、息の量・速さを変えてみる。
- 6 5の息をリコーダーに吹き込む。

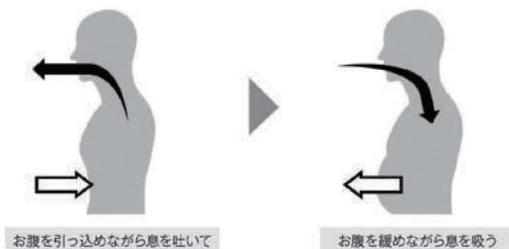


図2 呼吸法 (本文 p.3-l.18 ~ p.4-l.2) (<https://www.baby-yogaarc.com/2017.7.10>)

こうした最初にお腹をへこませながら息を吐いていく方法は、ヨガの呼吸、禅の丹田呼吸、ベル・カント唱法にも共通した方法で、副交感神経の働きを促すため、心が安定し、集中力がつく。

2-3 音の響かせ方

前述の姿勢と呼吸法を踏まえて、次に「すーっと伸びる音」を出す練習をする。

- 1 リコーダーの足部管を持って前述の呼吸で、「音を遠くへ投げるイメージで」息を入れる。
- 2 自分の出す音に意識を集中して、「どんな息で吹いたら楽器がきれいに鳴るか」を探す。
- 3 さらに、「響く音」を出すために、自分の声の響きを感じる練習をする。花の香をかぐ時のように鼻から息を吸うと、喉の上側と鼻腔が開く。この状態でハミングをすると声が鼻腔に響くのを感ずることが出来る。ハミングから母音のイ・オ・ア・エを用いた発声練習を行うと、より確実に鼻腔の共鳴を体得することができる。発声法に共通するテクニックである。

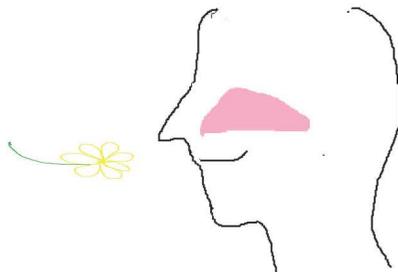


図3 鼻腔の共鳴 (本文 p.4-l.8 ~ l.11)

四

- 4 鼻腔の共鳴を使ってリコーダーを吹くと、楽器にも振動が伝わる。すなわち、楽器が体の一部となって共鳴している状態である。

音の出し方をクラス授業で指導する場合は、教師が楽器に入れる息の量を変えて、その時音がどう変化するか、メッサ・デイ・ヴォーチェを実演して聴かせる。そして、各人で「自分の楽器をきれいに鳴らすには、どんな息で吹いたらよいか」を聴いて探すよう促す。すると、かなりの学生が吹きすぎたことに気づく。管楽器専攻の学生にとっては、リコーダーは息が余って吹きにくい様子も見られる。この「らかな息」で吹いた、「すーっと伸びる音」が基本である。

「響く音」についても同様に、まず教師が楽器も体の一部となって響いている音を実演して聴かせる。上述の3のハミングをしながら楽器を吹くと、共鳴による楽器の振動を感じやすい。これは、発声法に通じるテクニックであるため、声楽専攻の学生にとっては理解しやすいようである。

「音の響かせ方」は、声楽の発声と同様にリコーダーの低音域・中音域・高音域では、それぞれ頭部の下部・中央部・上部に共鳴させて吹くと全ての音域で響いた音になる。

以上は、筆者が自ら実践し、教授しているリコーダーの呼吸法と音の出し方である。

この方法は、声楽の黄金時代といわれる17世紀にイタリアで確立されたベル・カントの歌唱様式に通じるものがあると考えられる。ルネサンス期には、歌手が楽器を演奏することは珍しくなく、リコーダーは歌手にとって最も演奏しやすい楽器であった。既に完成された楽器であったリコーダーの演奏法に、ベル・カントの歌唱テクニックが用いられていたと考えるのは、自然なことである。1535年にヴェネツィアで出版されたガナッシの『フォンテガウラ』は、リコーダーの演奏法を扱った最初のリコーダーの教則本であり、そこには、17世紀のオペラ歌手の初期のコラトゥーラに発展する楽句装飾法の例が詳しく記されている。



図4 Sylvestro Ganassi:Opera Intitulata Fontegara Venezia 1535 表紙(本文 p.4-l.36 ~ p.5-l.11)

2-4 ソロの試験とそれまでの授業についてのアンケート

学生がテキストを中心に実習したりコーダーの基本的奏法をどの程度習得できたかを確認するために、15回の授業の半ばで、ソロの試験を行った。試験の内容は、ピアノ伴奏譜付きのテキスト中の数曲を課題曲として提示し、任意の一曲を選択して、二人一組でリコーダーと伴奏を交替して演奏するというものである。試験の前には合わせをしてから臨むよう指導した。

課題曲 『アルト・リコーダーの世界』(河西保郎編著)より

- 1 《Air》 河西保郎作曲
- 2 《野ばら》 ウェルナー作曲
- 3 《春への憧れ》 W.A モーツァルト作曲
- 4 《グリーン・スリーブス》 イングランド民謡
- 5 《アヴェ・マリア》 カッチーニ作曲
- 6 《愛の挨拶》 エルガー作曲

また、ソロの試験後に自己評価アンケートを行なった。これらのアンケートの目的は、

- 1 試験に対する取り組み方と本番での演奏に臨む姿勢（1－質問1、2、3、4）、
- 2 学習した技術を演奏に生かしているか（2－質問6、7）、
- 3 授業の内容が学生一人一人にどの程度伝わっているか（2－質問8、9、）

を教師が確認することであり、加えて、学生が自己評価をすることで、各々の課題を確認し次回の発表の機会や今後の授業に生かすことである。

1 ソロの試験について

質問1 本日の演奏を総合的に評価するとどうなりますか。

質問2 十分に準備をすることができましたか。

質問3 本番で練習の成果を出すことができましたか。

質問4 曲のイメージを持って演奏することができましたか。

質問5 楽しんで演奏することができましたか。

2 リコーダーの基本的奏法について

質問6 呼吸を意識して吹くことができましたか。

質問7 タンギングを意識して吹くことができましたか。

質問8 ハ長調、ヘ長調、ト長調の運指を習得することができましたか。

質問9 バロック式（イギリス式）とジャーマン式の楽器と運指の違いを理解することができましたか。

アンケート結果一覧

対象学生1:2017年度前期「合奏自習」履修者 3年次15名（音楽音響デザインコース3名、ピアノコース2名、声楽コース2名、ミュージカルコース1名、管楽器コース7名）

表1 質問1 100点満点を10点単位で評価した場合の点数ごとの人数

点	0/100	20/100	30/100	40/100	50/100	60/100	70/100	80/100	90/100	100/100
人	0	0	0	2	1	2	3	4	3	0

表2 質問2～9を3段階で自己評価した人数 ○できた △どちらともいえない ×できなかった

	質問2	質問3	質問4	質問5	質問6	質問7	質問8	質問9
○	12	6	12	13	13	13	10	8
△	3	8	3	1	2	2	3	5
×	0	1	0	1	1	1	2	2

対象学生 2：2017 年度「リコーダー・アンサンブル 1」履修者 2 年次 8 名（音楽教育コース）

表 3 質問 1 100 点満点を 10 点単位で自己評価した場合の点数ごとの人数

点	0/100	20/100	30/100	40/100	50/100	60/100	70/100	80/100	90/100	100/100
人	0	0	2	1	2	3	0	0	0	0

表 4 質問 2～9 を 3 段階で自己評価した人数 ○できた △どちらともいえない ×できなかった

	質問 2	質問 3	質問 4	質問 5	質問 6	質問 7	質問 8	質問 9
○	6	2	7	7	7	5	4	7
△	2	6	1	1	1	3	3	1
×	0	0	0	0	0	0	1	0

上記のアンケートを分析すると、学生の自己評価と教師による評価は概ね一致している。

対象学生 1、2 とも試験の準備は十分にできた学生が多く、対象学生 1 は、演奏を専門とするコースの学生が 2/3 を占めているためか、本番で練習の成果を出すことが出来た学生が半数近い。演奏を専門としない学生については、アルト・リコーダーを初めて持つ学生もおり、授業開始時点でのレベルは様々であったが、8 割以上の学生が、曲のイメージを持って楽しんで演奏することが出来た。

呼吸とタンギングについては、概ねその両方を意識して吹くことが出来ており、教師の評価と一致している。

運指については、不正確な運指で演奏している学生数が、アンケートの自己評価を上回っていた。多くの場合、右手の薬指と小指を塞ぐべき運指で塞いでいない。このためソプラノとテナー・リコーダーの「へ音」と、アルトとバス・リコーダーの「変ロ音」の音程が高い状態で吹いている。これは、ほとんどの学生がソプラノ・リコーダーを小学校で学習した時に、ジャーマン式の楽器を使用していたことも一因と考えられる。教育現場におけるリコーダーの運指については多くの議論があるが、筆者の授業では、パロック式のアルト・リコーダーを、アンサンブルにはパロック式の木管リコーダーを用いている。

3 アンサンブルの実習

3-1 グループ分けと選曲

各グループにソプラノ、アルト、テナー、バス・リコーダーが入るように、自主的に 4～5 人のグループに分かれて行った。

対象学生 1（2017 年度前期「合奏自習」履修者 3 年次 15 名）5 名×3 組

A グループ（音楽音響デザインコース 3 名、ミュージカルコース 1 名、管楽器コース 1 名）

B グループ（管楽器コース 5 名）

C グループ（ピアノコース 2 名、声楽コース 2 名、管楽器コース 1 名）

対象学生 2（2017 年度「リコーダー・アンサンブル 1」履修者 2 年次 8 名）4 名×2 組

D グループ（音楽教育コース 4 名）

Eグループ（音楽教育コース4名）

対象学生3（2017年度「リコーダー・アンサンブル2」履修者4名）4名×1組

Fグループ（音楽教育コース年3年次3名、ジャズコース4年次1名）受講2年目のクラス

A、B、C、D、Eグループはアルト・リコーダー以外の新しい楽器に慣れることから始め、各パート1名の編成で、初級のルネサンスの声楽曲と器楽曲を実習した。

A,B,Cグループ 五重奏（ソプラノ1名、アルト2名、テナー1名、バス1名）

《花咲く日々に生きる限り》H. プリュエーデル作曲

《バヴァーヌとガイヤルド》A. ホルボーン作曲

D,E,Fグループ 四重奏（ソプラノ1名、アルト1名、テナー1名、バス1名）

《今こそ私は去らねばならない》J. ダウランド作曲

《バス・ダンス》T. スザート作曲

これらの曲を選択した理由は、旋律がなめらかに動くこと、各パートが概ね同じリズムであること、バス・リコーダーの初心者は最低音へ音を出しにくいいため、最低音が出てこないト長調であること、フレーズの終わりで長三和音の響きを聴くことが出来る、等である。

Bグループは特に達成度が速かったため、より高度な対位的な楽曲の実習を試みた。

《木々は緑に》W. バード作曲

Fグループはルネサンス・リコーダーを使用して実習し、

《ファンタジア》、《ウォルシーズ・ワイルド》W. バード作曲

を授業「音楽史」で演奏した。

また、通常のリコーダーを用いて

《美女と野獣》A. メンケン作曲

「借りぐらしのアリエッティ」より《アリエッティの歌》S. ケイビー作曲

を授業「楽器と演奏論」で演奏した。

「アルプスの少女ハイジより」《おしえて》渡辺兵夫作曲

を授業の発表会で演奏した。

アンサンブルの実習は、各グループに適当な曲を与え、パート練習が出来たグループから合奏に入るという自主性を尊重した形式で、教師とティーチングアシスタント各1名が巡回して指導した。

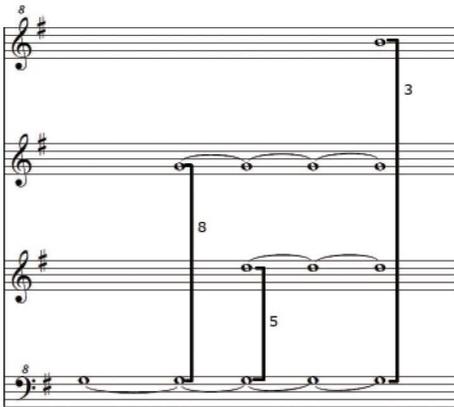
「4人あるいは5人で音を合わせる経験が初めて」という学生、あるいは、「他の楽器ではやっているがリコーダーで音を合わせるのは初めて」という学生も多い。同じ音を吹いて、「自分の音が相手の音に比べて高いのか低いのか」を聴く練習から始め、「高い人が頭部管と中部管のジョイントを少しだけ抜いて低い人に合わせる」、あるいは「高い人が息の量を少なめに吹いて低い人に合わせる」など、相手の音を聴いて自分の音を調整する習慣をつけるよう指導した。基本の「すーっと伸びる音」が出ていると、音合わせの時に聴きやすい。各グループ内でアンサンブル経験者が中心となって、それぞれのペー

スで実習を行っていた。

3-2 長三和音の合わせ方

リコーダー・アンサンブルの実習の目的の一つは、純正和音を体験することである。純正和音は、平均律にはない美しさを持っている。授業の初期の段階でこれを習得することが出来れば、アンサンブルの質が向上するとともに一体感を味わうことが出来る。

A、B、C、D、Eグループはト長調の曲を実習しているので、各々の曲からト長調の主和音をピックアップする。楽譜1に示すように、まず、根音をオクターヴで合わせ、次に5音を平均律よりわずかに（約2セント）高くとって5度が純正に響いたら、3音をかなり（約14セント）低めにとる。この時に聞こえる低いト音（差音）が最初に合わせた根音と合えば、長三和音が純正に響く。最初は実際には吹いていない音を聴くことから始め、その音がト音と合った時の感覚を習得することを目標にした。曲の出だしの音、フレーズの終わりの長い音、最後の音、と、曲の途中で止まって何種類かの長三和音を合わせていくうちに、学生たちは「どの音をどのように吹けばよいか」を理解して、響きを聴くことが出来るようになっていった。リコーダーの音質は差音を聴きやすく、息の加減で音高を変えることが出来るため、全てのグループが初期の段階で純正和音の響きを体験することが出来た。



楽譜1 長三和音の合わせ方（本文 p. 8-1. 29 ~ 1. 33）

また、各パートのリズムが概ね同じにも拘らず、同時に発音されない場合がある。メンバー全員が同じ拍を感じて、強拍にアクセントを置くよう指導すると合いやすかった。また、フレーズの取り方、強弱、曲想等をメンバーで話し合って工夫するよう促した。グループ内で音楽的な議論をすることも、アンサンブルの目的のひとつである。ルネサンス期の音楽の楽譜はシンプルなものが多く、曲想、強弱記号等の表記がない。どのように演奏するかは奏者に任されているため、教材に最適と考えられる。

授業では、アンサンブルの実習の授業を7回行い、最終回の8回目に発表会を行った。発表の後に各グループの代表者に感想を述べてもらい、下記に示す自己評価アンケートを行った。今回のアンケートは、本番の演奏についての評価は前述のソロの試験後のものと同様で、質問6から10は、「アンサンブルに大切なことを理解して実習し、仲間と演奏する楽しさを体験することが出来たか」を確認すること

が目的である。

発表会のプログラム

対象学生1：2017年度前期「合奏自習」

- 1 《星に願いを》L. ハーライン作曲（Cグループ）
- 2 《アポロが初めてダフネを愛した時》J. ダウランド作曲（Aグループ）
- 3 《木々は緑に》W. バード作曲（Bグループ）

対象学生2、3：2017年度「リコーダー・アンサンブル1、2」

- 1 《美女と野獣》A. メンケン作曲（Dグループ）
- 2 《パヴァーヌ、ブランル、ロンド》T. スザート作曲（Eグループ）
- 3 「アルプスの少女ハイジより」《おしえて》渡辺兵夫作曲（Fグループ）

3-3 アンサンブルの発表までの授業に関するアンケート

1 本番での演奏について

- 質問1 本日の演奏を総合的に評価するとどうなりますか。
- 質問2 十分に準備ができましたか。
- 質問3 本番で練習の成果を出すことができましたか。
- 質問4 曲のイメージを持って演奏することができましたか。
- 質問5 楽しんで演奏することができましたか。

2 アンサンブルについて

- 質問6 お互いの呼吸を感じて吹くことができましたか。
- 質問7 ハーモニーの移り変わりを聴くことができましたか。
- 質問8 自分以外のパートを聴くことができましたか。
- 質問9 メンバーとの一体感を感じることができましたか。
- 質問10 アンサンブルを楽しむことができましたか。

アンケート結果一覧

対象学生1：2017年度前期「合奏自習」履修者3年次15名（音楽音響デザインコース3名、ピアノコース2名、声楽コース2名、ミュージカルコース1名、管楽器コース7名）

表5 質問1 100点満点を10点単位で評価した場合の点数ごとの人数

点	0/100	20/100	30/100	40/100	50/100	60/100	70/100	80/100	90/100	100/100
人	0	0	0	0	0	0	4	4	2	4

表6 質問2～10を3段階で自己評価した人数 ○できた △どちらともいえない ×できなかった

	質問2	質問3	質問4	質問5	質問6	質問7	質問8	質問9	質問10
○	15	12	14	13	14	14	13	13, 5	4
△	0	3	1	2	1	1	3	1, 5	0
×	0	0	0	0	0	0	0	0	0

対象学生2：2017年度「リコーダー・アンサンブル1」履修者2年次8名（音楽教育コース）

表7 質問1 100点満点を10点単位で自己評価した場合の点数ごとの人数

点	0/100	20/100	30/100	40/100	50/100	60/100	70/100	80/100	90/100	100/100
人	0	0	0	0	0	3	1	1	0	0

表8 質問2～10を3段階で自己評価した人数 ○できた △どちらともいえない ×できなかった

	質問2	質問3	質問4	質問5	質問6	質問7	質問8	質問9	質問10
○	4	3	7	8	6	5	6	4	8
△	4	4	1	0	2	3	2	4	0
×	0	1	0	0	0	0	0	0	0

上記のアンケートを分析すると、対象学生1のクラスは、本番の演奏に対する自己評価が、全員が70点以上であり、100点満点も4人とかなり高い。これは、教師の評価と一致しており、本番までに十分準備が出来た結果である。ソロの試験では十分に練習の成果を出すことが出来た学生が6名であったが、アンサンブルでは12名と2倍に伸びている。アンサンブルについては、どのグループも達成感が得られた結果が出ている。発表会での演奏はA,Cグループは練習時よりも音程がよくハーモニーの調和が感じられる演奏であった。Bグループは、難曲を演奏した満足感は感じられたが、更なる発展を期待したい。

対象学生2のクラスは、アンサンブルの方法は理解したものの、本番で練習の成果を出すことが出来なかった学生が半数であった。全員がアンサンブルを楽しんで演奏することが出来た。

対象学生3：2017年度「リコーダー・アンサンブル2」履修者4名（音楽教育コース3年次3名、ジャズコース4年次1名）

1回目（授業「楽器と演奏論」に出演後）

表9 質問1 100点満点を10点単位で自己評価した場合の点数ごとの人数

点	0/100	20/100	30/100	40/100	50/100	60/100	70/100	80/100	90/100	100/100
人	0	0	0	1	1	0	2	2	0	0

表 10 質問 2～10 を 3段階で自己評価した人数 ○できた △どちらともいえない ×できなかった

	質問 2	質問 3	質問 4	質問 5	質問 6	質問 7	質問 8	質問 9	質問 10
○	3	4	1	4	4	4	3	4	4
△	1	0	3	0	0	0	1	0	0
×	0	0	0	0	0	0	0	0	0

2 回目 (授業内の発表会后)

表 11 質問 1 100 点満点を 10 点単位で自己評価した場合の点数ごとの人数

点	0/100	20/100	30/100	40/100	50/100	60/100	70/100	80/100	90/100	100/100
人	0	0	0	0	0	1	0	2	1	0

表 12 質問 2～10 を 3段階で自己評価した人数 ○できた △どちらともいえない ×できなかった

	質問 2	質問 3	質問 4	質問 5	質問 6	質問 7	質問 8	質問 9	質問 10
○	4	2	4	4	4	3	3	4	4
△	0	2	0	0	0	1	1	0	0
×	0	0	0	0	0	0	0	0	0

上記の対象学生 3 のクラスは、リコーダー・アンサンブル履修 2 年目のクラスでアンサンブルの基本は習得しているため、ルネサンス・リコーダーのコンソート・セットでの演奏を試みた。半音高い明るい響きで楽器自体がミーントーンに調律されているため、純正和音が美しく響いていた。授業の後半は、子どもたちに聴かせたい音楽を中心に自由に選曲し、効果音を入れる工夫をするなど、楽しんで演奏していた。

対象学生 1、2、3 ともに「アンサンブルに大切なことを理解して実習し、仲間と演奏する楽しさを体験する」目的は、本番での演奏の出来不出来にかかわらず、概ね達成されていたと考えられる。

アンケートの自由記入欄から

- ・ 運指やソロの簡単な曲から少し高度な曲、リコーダー・アンサンブルまでいろいろな形態の曲が出来たし、基礎的なことも分かった。中学校に教育実習に行くので、その時に困らないくらいには吹けるようになったと思う。
- ・ バス・リコーダーというものを初めて知って、音を出すのが難しく、楽器によっても全く違う音が出て奥が深くやりがいがありました。
- ・ 音程を合わせるのがとても大変でした。音量も出ないし、吹きづらかったけどリコーダーでアンサンブルするのは初めてだったので楽しかったです。
- ・ アルト・リコーダーを大学に入って初めて吹いたのに、半年でゆっくりだったら意外と吹けるようになって自分でもびっくりしています。木のリコーダーも体験することが出来ていい経験でした。
- ・ 段 4～5 人でアンサンブルすることがないので、やっていてとても楽しかったです。

- ・バス・リコーダーは初めて授業で吹いたので、新たな発見が沢山ありました。低音が好きなので、バスを担当できてよかったです。
- ・リコーダーが楽しいです！もっと、いろんなことを知って、リコーダーの良さを生徒に伝えられる教師になりたいです！
- ・自分たちのグループは前より縦のリズムが合ってきて、周りの音を聴いてアンサンブル出来て楽しかったです。
- ・本番で練習通りにできなかったことが心残りです。
- ・練習の成果をあまり出せずに悔しかったです。が、何があっても大丈夫なようにもっと練習しておくべきだったと思っています。和音の合わせ方などを知れてよかったです。
- ・グループ内での決め事（アーティキュレーションやテンポ）が本番の演奏で達成できてよかったです。この授業でリコーダーへの印象がだいぶ変わりました。綺麗で可愛い音をもっと伝えたい。本番は緊張しましたが、楽しくアンサンブル出来ました。お互いの音を聴き合っただけの演奏、とても楽しくて、これからもやりたいと思いました！
- ・リコーダー好きの4人で吹きました。教える立場になったら「楽器が好き」という気持ちを生徒に持ってもらえる指導をしたいです。
純正律の響きを出せたら、ものすごく美しいだろうなと思っています。
- ・本番でずれて耳で合わせました。本番は何があるかわからないので、勉強になります。
- ・ハーモニーがきれいに合った時にアンサンブル楽しい！と思いました。
- ・顔を上げて息を合わせる楽しさを感じることが出来ました。
- ・本番に弱かったです。ずっと楽譜ばかり見てしまっていたので、アイ・コンタクトをとれたらもっと良くなっていたかなと思いました。

4 現任教員（小・中高等学校の音楽専科）の卒業生に聞き取り

全国で教職についている卒業生に、在学中に受講したリコーダー・アンサンブルの授業が、どんな形で現在の教育活動に繋がっているかを電子メールで尋ねてみた。

武蔵村山市立小中一貫校村山学園 小学校音楽専科教員からの回答

- ・ 1つのものを作り上げる楽しさ
- ・ アンサンブルをする楽しさ
- ・ 仲間と練習する大切さ
- ・ 自他の音を丁寧に感じて響きを感じることを、教えることだと思います。

千葉県立茂原樟陽高等学校教員からの回答

リコーダー・アンサンブルのやり方は、学生時代に勉強できてとてもよかったですと思っています。

リコーダーならではの息づかいや相手を思っただけの曲想の付け方は授業をする際とても気を付けていま

す。副科で勉強した濃い時間が、今に繋がっていると日々実感しています。

5 おわりに

本研究の目的は、筆者が行っている授業を通して「音楽教育におけるリコーダー・アンサンブルの意義」を確認し、今後の発展に生かすことである。どんな楽器もアンサンブルをするためには、個人がある程度その楽器に精通していることが望ましい。授業では、まずリコーダーの基本的奏法を教授し、その後アンサンブルの実習を行った。

リコーダーの基本的奏法を指導する期間は、常に学生が自分の行っていることに「意識を集中する」ように声掛けを行った。楽器を持つ前に体をほぐす体操を行い、胸を開き骨盤を立てて座る。意識を呼吸に集中して深い呼吸を繰り返すと、教室の雰囲気次第に落ち着いてくる。深い呼吸は副交感神経の働きを促すため、リラックスした状態でリコーダーを吹くことが出来る。この息を細長く吐き楽器に入れると「すーっと伸びる音」が出る。次は、この音に意識を集中して「自分の良い音」を探す。次のステップの鼻腔の共鳴を使った「響く音」を探すことのできた学生は少ないが、ソロの試験を聴く限り、全員が自分の演奏に集中することが出来ていた。

これらのことに常に意識を向けるよう喚起しつつ、テキストの楽曲を次々に演奏していくうちに、全員が安定した自然な呼吸でソロを吹くことが出来るようになっていた。

アンサンブルの実習は、どのグループも「相手の音を聴いて合わせる」習慣が身に付き始め、「純正な長三和音の響き」を味わうことによって、メンバーとの一体感を感じる事が出来ていた。グループごとに合わせをする時には、互いに技術的なアドバイスをし合う、あるいは演奏方法について議論をする様子が見られた。

実習の状況、発表会での演奏、アンケートの結果、及び、現役教員の卒業生からの回答を顧みて、リコーダー・アンサンブルの意義のひとつである「協調性の向上」は、概ね確認された。

さらにその意義を生かすためには、子供たちが初めてリコーダーに触れる小学3年生の時期に、専門性を持った指導者を導入することが必要になる。リコーダーという楽器の特性を把握し、リコーダーは「自然な息で吹く楽器」であり、「リコーダーでアンサンブルをするのもっと楽しい」ということを伝えられる指導者を育成していくことが今後の課題になるであろう。リコーダーを吹くことで、心が安定し、生活に潤いが生まれ、生きる力にもつながると考える。そのことをより多くの人々に伝えていきたい。

引用・参考文献一覧

- 1 安達弘潮 1996『リコーダー復興史の秘密』音楽之友社
- 2 河西保郎編著 2003『アルト・リコーダーの世界』ケイ・エム・ピー
- 3 リード,コーネリウス・L/渡部東吾訳 2008『ベル・カント唱法』音楽之友社
- 4 「骨盤（仙骨）を立てた座り方」 <https://www.karada-aging.jp/practice/sonota49/> (2017.7.9)
- 5 「呼吸法」 <https://www.baby-yogaarc.com/> (2017.7.10)
- 6 斎藤 孝 2001『身体感覚を取り戻す 腰・ハラ文化の再生』日本放送出版協会

- 7 佐保田鶴治 1985 『ヨガ入門』池田書店
- 8 高久新吾 2011 「小学校音楽科における専科制度の提唱」『浜松学院大学研究論集』(7)p.61-74
- 9 山中和歌子 2015 「戦後の音楽教育におけるバロック式リコーダーの導入」『福岡教育大学紀要』第64号 第5分冊 p.25-32
- 10 吉澤 実 2012 『絶対！うまくなる リコーダー100のコツ』ヤマハミュージックメディア
- 11 「Sylvestro Ganassi:Opera Intitulata Fontegara Venezia」1535 表紙
[http://www.recorderhomepage.net\(2017.8.1\)](http://www.recorderhomepage.net(2017.8.1))